

母ちゃんのアジフライ

三角 逸郎

一・

まさしは小学三年生です。通っている学校は大きな団地の傍にあります。

まさしの家では、父ちゃんが母ちゃんと一緒に魚屋さんをやっています。名前は「魚新（うおしん）」といえます。

まさしは、頭はぼうず刈りで二組の友達より体も大きくて力もあります。

「まさし、おまえは気は優しく力持ちだね、金太郎さんみたいだね」

母ちゃんは、ほめ上手です。

母ちゃんがそういうときは、何か手伝って欲しいときです。

そんな時、まさしはすすんで母ちゃんの手伝いをします。

まさしを見ながら、父ちゃんは、「いいぞ。まさし、力がついたな。そうやっ

て母ちゃんを手伝ってれば、父ちゃんみたいに大きくなれるぞ。ぼうず頭もよく似合うしよ」といってそのぼうず頭をなでました。

母ちゃんも、にこにこしながら、「まさし、ぼうずの子って、男の子らしくて母ちゃんは好きだな」といいます。

ぼうず頭の子は、まさしのいる三年二組には、もうひとり、健一しかいないし、いかにも魚屋さんの子みたいなので、まさしはあまり好きではありません。

「おれ、ぼうず頭っていやだよ。髪、のばしてもいいだろ」

母ちゃんは、ちよつと考えましたが、「ぼうず頭なら、母ちゃんがかれるからさ……」と言いました。

「……散髪屋さんも、いまじゃ、けっこう高くなったからねえ。でも、まさしも三年生だしね、ぼうずはイヤかい」

まさしはだまってうつむいてしまいました。

（おれんち、貧乏なのかな）

二・

ある日のことです。

父ちゃんが「まさしも三年生か……あんな、時々でいいから、父ちゃんの店を手伝ってくれないか？」と言いました。

そして、親指と中指をこすり合わせて、お金を数える仕草をしました。

「そうしたら、おまえにお小遣いをやろう。そう、アルバイトだな。どうだい？」

まさしは、そっと胸の内でおこづかいの計算をしました。

（もつと大きいグローブがほしいな……）

まさしは少年野球チームに入っているのです。このごろ急にまさしの手が大きくなって、今までのグローブではきついのです。

「うん、手伝ってもいいけど……、おれは魚はいじりたくないよ。それでよかったら、やってみるよ」

「なんだ、まさし、おまえ、魚屋なのに魚をさわるのってイヤか？」

まさしは黙ってうつむいています。

それでも、父ちゃんはうれしそうです。

「おー、まさし、やってくれるか……。まさしが手伝ってくれると、父ちゃんもうれしいぞ。魚屋にはな、力仕事もたくさんあるからな」

父ちゃんはまさしのぼうず頭を乱暴になでました。

（痛えーな。父ちゃん）

痛かったけど、まさしは、すこしだけ、自分が大人になったような気がして嬉しかったのです。

三・

まさしは、週に一回、日曜日の午前中に手伝うことにしました。

父ちゃんは、朝の四時に起きて魚河岸に仕入れに行きます。戻ってきた父ちゃんが店を

開くのをまさしは手伝うのです。

父ちゃんの指図で盤台を運んだり、大きなバケツを決まった場所に並べたりします。店の軒先に日よけのシートを引っ張り出したり……、けっこう力のいる仕事です。

筋肉がついて野球にもいいかもしれないな、とまさしは思いました。

最初の日曜日に、手伝いが終わったとき、「最初だからな、くたびれただろ。はい、ご苦労さん」

と行って、千円札をくれました。

まさしは「え？ 千円も……いいの？」と、つい声に出して言いました。

「まさし、もらっときな。ご祝儀相場だよ」そばで見ていた母ちゃんが言いました。

「ごしゅうぎ……そば？」

まさしを見て、母ちゃんは笑いながら、「まさしにはまだ、むつかしい言葉だね。」

『そば』じゃないよ。『そうば』だよ。まあ、おめでたい日だから、オマケしとく、って父

ちゃん言いたいんだろ」

「ありがと。父ちゃん」

まさしは、ああ、けっこう疲れたな、といながら父ちゃんのまねをしてみました。

腕をぐるぐる回すのです。そうしながら、店の奥の四畳半に戻っていきました。

まさしの家は魚屋の裏の続きにあります。

母ちゃんは、まさしの後姿を見ながら考えました。

（父ちゃん、まさしにこの魚屋を継がせたいのかねえ）

日曜ごとに、店で父ちゃんを手伝い始めたまさし。

あるとき、そこに、岸くんが通りかかりました。団地に住む岸くんは、まさしと同じ二組です。岸くんは、勉強のできるグループのリーダー格です。

まさしは、岸くんとは普通の付き合いで、いままで一緒にたくさん遊んだことはありません。

せんが、仲が悪いわけではありません。

まさしは、どちらかという運動が好きな元気のグループと遊んでいます。

岸くんは、お母さんと一緒にどこかにお出かけの様子です。

「こんにちは、いい天気ですねえ。お出かけですか？」

母ちゃんがにこにこしながら、岸くんのお母さんに声をかけています。

岸くんが、手伝っているまさしに気がついて、やあ、と片手を挙げました。

「ええ、ちよつと、そこまで」

岸くんのお母さんもにこにこしてこつちを向いて返事をしています。

まさしは、とっさに、店の奥に引っ込んでしまいました。

（岸くんを店を手伝っているところを見られたな。いやだな）

何もしゃべらない前に、岸くんはお母さんと向こうに歩いていきました。

四・

そんなことはありませんでしたが、まさしは、手伝いを止めませんでした。

手伝いをすると小遣いがもらえるからです。まさしは、お金をたくさん貯めて早く新しいグローブを買いたくてたまりません。まさしも、このアルバイトで重いものを運んだりして体を動かすことは嫌いではないのです。

それに、もうひとつは、まさしがそばにいると父ちゃんが嬉しそうにしているからです。

今日、まさしが目を覚ますと、父ちゃんの声が聞こえて今さう。

「あれ？ 今日父ちゃんがいるぞ」

まさしは「あ、そうか」と思い当たりました。

「おう、まさし、おはようさん。今日はね、第四日曜日だ……。と言うことは、魚河岸が休みなんだ。それでな、魚新も休みだ」

魚新の定休日は、魚河岸の休みと合わせて毎月第四日曜日です。休みは月に一回しかありません。

いつもの日曜日なら、朝四時には起きだして河岸に仕入れに行く父ちゃん。でも、今日だけは別です。

いつも口ぐせのように「うちの魚は新鮮さが売りのその名も『魚新』さ。魚河岸が休みの日曜日にも、魚が並べてあるそこいらのスーパーには負けないぜ」とまさしにも言っています。

でもそこいらのスーパーができてから、父ちゃんの魚新のお客さんが減っていることに、まさしは気がついていきます。

店が定休日でも、父ちゃんの休みはお昼までです。

父ちゃんと母ちゃんには、やることがたくさんあります。定休日にしかできない店の大掃除をするのです。

昼ご飯を食べると、一休みする間もなく、

父ちゃんと母ちゃんは店に出て行きました。

「おい。まさし、今日はきついかな、でも、その分、たんまりバイト代は出すよ」

まさしは、声のするほうをみました。

父ちゃんが、大きな取っ手のついたブラシでコンクリートの床をゴシゴシ洗っています。

「まさし、そっちからそのゴムホースで水を流してくれ」

まさしも、長靴をはいて、さっそく水道のホースを握り締めました。

父ちゃんがブラシでこすっている床。そこをめがけてホースで水を流しますが、なかなかうまく呼吸が合いません。

やっとな、まさしと父ちゃんの作業も調子が出てきました。しばらく夢中でやっている、店の床はどこもかしこもきれいに洗い流されました。

その次は、魚の陳列ケースです。

次は大きなまな板です。

そこらじゅうの道具が、みんなさっぱりと

清潔になりました。

まさしも、こうして父ちゃんと力仕事をしている、いい気持ちになります。

学校であった友達との口ゲンカや七十点の算数のテストのことなど、きれいさっぱりに忘れてしまいます。

「……よし。これでみんなきれいになったぞ」

父ちゃんと母ちゃんは、店の隅々まで見回して「これでおしまいかな？ やり残したところはないかな」と言っています。

まさしには、定休日明けの明日の月曜日、父ちゃんの張り切った叫び声が聞こえるようです。

五・

「次は、いよいよ、魚新の名物、イカとアジのはらわたの塩辛の仕込だ」

まさしは、母ちゃんから「商店街のおじさんたちがさ、お酒を飲むとき、父ちゃんの塩

辛が良く合うのよね」って聞いたことがあります。

父ちゃんが母ちゃんに号令をかけました。

母ちゃんがまさしをみて言いました。

「まさしは、もう、終わりにしていいよ。あとは母ちゃんたちでやれるから」

父ちゃんは、すこし残念そうな顔をしました。

「せっかくだからさ。父ちゃんが塩辛を作るところを見ていけよ。魚新の名物だぞ」

「臭いよ。まさし……止めときなよ」

まさしは、なぜだか判りませんが、急に父ちゃんが塩辛を作るところが見たくなりました。

「いいよ。父ちゃんの塩辛って、どうやって作るの？ 見てみたい」

父ちゃんはにっこりと笑いました。

「そうこなくっちゃ」

まさしは、店の裏にある作業小屋までついていきました。

（止めとけば、よかったなあ）

小屋に入るとすぐに後悔しました。

塩辛の作業小屋は、何ともいえない臭いがします。鼻をつまみたくなりましたが、父ちゃんに悪いような気がして出来ません。

父ちゃんと母ちゃんは、塩辛の仕込みを始めています。ポリバケツにゴム手袋を突っ込んで寝かせてあった塩辛をかき混ぜはじめました。

なにやら汁みたいなのが、まさしにかかります。

「ほれ、まさし。おまえは、後ろにどいて、どいて！」

きびきびと、なれた手順で父ちゃんと母ちゃんが働くところを見ると、不思議なことに、魚のはらわたや塩辛の臭いもだんだんと気にならなくなりました。

結局、塩辛を作るところを最後まで見学しました。

父ちゃんは「どうだ？　すごいだろ」とま

さしに言いました。まさしは、どう、すごいのか、どう返事していいのか判りません。

母ちゃんは、さっさと手を洗っています。

その晩、父ちゃんは「まさしは、役に立つようになったなあ」とご機嫌です。

母ちゃんは「まさし、風呂に入って石鹸でよく身体じゅうを洗うんだよ」と、二回も注意しました。

六・

休み明けの月曜日。

二組の教室は、給食の時間が終わって当番さんが後かたづけを「始めています。

ゴトゴトと椅子をひいて立ち上がった男子もいれば、お隣さんとぺちやくちやおしゃべりをはじめた女子もいます。

この後は「終わりの会」だけで、今日はおしまいです。

教室中が、ざわざわとして落ち着きません。

「なんかへんなにおいがするな？」

向こう側の席にいた岸くんが、あたりをきよろきよろ見回しました。

「もしかして、山田くん？」

岸くんがまさしを指さしています。

まさしは、教室中がざわざわしているので岸くんが何を言っているか聞こえませんでした。

岸くんは、くんと鼻を鳴らしながら、まさしの席まで寄って来ました。それから、ぐるぐるとまさしの周りを一周しました。

シャツのにおいをかぐような格好をします。

「やっぱり、臭いのは……山田くんからみた
いだね」

まさしは、自分でも袖に鼻を近づけてにおいをかいでみました。

（昨日、風呂にも入ったしな、臭いはずない
けどな）

暇な友達が、まさしと岸くんのまわりに集まってきました。

「なんだ、二人とも、どうしたの？」

仲良しグループが岸くんのまわりに集まっています。

岸くんとあと五人くらいの友達が団地に住んでいるので、まさしの家が団地のそばで魚屋をやっていることは、たいがいの友達は知っています。

でも、みんなは、まさしの家が魚屋さんをしていることなんか何も気にしていません。

「うん、臭うよ。魚の臭いがするよ」

岸くんは鼻の穴を右手の人差し指と中指で押さえました。

すると、そばにいた仲間も同じ格好をして「くさいな」と言いました。

岸くんは、まじめな声で

「でもね、山田くんの家は魚屋だから……魚臭つくても仕方ないよね」

教室の反対側でベীগマを回していたもうひとりのぼうず頭が、こちらにやってきました。

「どうしたの？ みんな」

ぼうず頭の健一は、商店街にある理髪店の子です。

「山田くんの家は魚屋だから……魚臭くつても……」と岸くんが言うところで、まさしはカッとききました。

お母さんから「まさしは、気は優しくって力持ちだね」と言われていることを、ほとんど忘れそうになりました。

「なんだと？」

まさしは握りこぶしを振り上げかけました。

「まさし、やめとけよ」

うしろから、健一の大きな声がしました。

「……」

まさしは、まだ、腹の虫がおさまりません。

ぼうず同士で、まさしと健一は気の合う元気者です。幼稚園の頃からずっとここに住んでいて、二人とも同じ少年野球のチームに入っています。

「まさし、お前が強いのはさ、みんな知って

るよ」

健一が、まさしをなだめています。

岸くんも、ちよつと、びっくりした顔です。

山田くんが思った以上に顔を真っ赤にして怒ったからです。

軽い気持ちで本当のことを口にしたただけなのに：：別に悪気はないのにな、と言う顔をしています。でも、臭いのもほんとだ、と言う顔もしています。

「ぼくは、ほんとのことを言ったただけだよ。山田くんは、さつき魚の臭いがしたよ。それって魚屋さんだからだろ。あんなこわい顔をして怒ること、ないと思うけどな」
そう、思ったけど岸くんは口にしませんでした。

でも、ちよつとだけですが、まさしのことを見つめました。

危ない空気が漂ってきました。

何が始まるのか、と面白がって男子たちが

たくさん集まってきました。

ほとんどは、どうなることかたまつて様子を見ているだけです。すこしですが、女子もその中に混じっています。

二組でいちばんお笑いを取るのが好きな佐藤くんが、はい、と右手を上げながら人の輪の中から出てきました。

「はい、山田が臭いと思う人は、手を上げて……」

大部分の友達は、勉強のできる岸くん、大きなぼうずあたまのさとし、どちらに味方していいか判らないのです。

まさしと岸くんを取り巻いていたみんなは、黙ったままです。

「えー……、どうしたの？ みんなあ」

佐藤くんも、えー、とってて右手を上げたままではつが悪そうにしています。

「おい。お前たち、そこでごちゃごちゃと、何やってんだ？」

教室の前にある先生机で連絡表を読んでい

たヤツチン先生が、こちらにやってきました。

七・

そんなことがあった月曜日。

学校から帰ってきたまさしはブスツとして
元気がありません。

「どうしたんだい」

まさしが何にも言わないまえに、母ちゃん
がちらっとこっちを見て聞きました。

けど、聞いている母ちゃんも、いまは、半
分は上の空です。

この時間、店先の大きなまな板の上は戦場
です。

母ちゃんは、ゴムエプロンをしてアジフラ
イの下ごしらえの真っ最中。

ぐっと包丁に力をこめてアジの頭を落とす
ます。

腹をさいてはらわたをさっと親指でかき出
します。

流しっぱなしの水道のホースでジャブジャ

ブとアジを洗いながら、次は、二枚に腹開きして、中骨やら何やらを除きます。

きれいに身だけになったアジが、次々にアルミのボール皿に並んでいきます。

てきぱきとした流れ作業。

（これから、母ちゃん、パン粉にまぶして

「魚新」一番人気のおいしいアジフライを揚げるんだな：）

「：うん、何でもない」

まさしはしばらくの間、母ちゃんの仕事振りをそばに立って黙って見ていましたが、やがて店先を離れました。

（母ちゃん： がんばってるな）

店は、夕方の買い物に来るお客さんでこれから忙しくなるのです。

まさしは、自分の部屋にはいると、カバンを放り投げました。

寝っ転がって、両手を頭の後ろにおいて、今日、学校であったことをもう一度思い出してみます。

（健一が止めなかつたら、岸のやつ、ぶん殴ってやったのに：）

―魚屋だから魚臭い、だって：

―父ちゃんや母ちゃんまで馬鹿にされたみたいだ：

―岸のやつ、団地に住んで会社に行ってるのがじまんなのかな：

―魚屋やってて、悪いか！

そんなことをグルグルまわりで考えていたまさしの耳に、店先から母ちゃんの元気な声が聞こえてきました。

「：日替わりでおかず作ってんだけどさ、月曜日のアジのフライ。金曜日のマグロのハンバーグもいいけどさ、やっぱり、魚新といえどアジフライだね。だんぜん、よく売れるのよ、なんでかね？ 父ちゃん」

さつきからアジをさばきながら、大声でしゃべっています。なんだか、自慢しているみたい聞こえます。

聞こうとしなくっても聞こえてくる母ちゃ

んの大きな声。寝っ転がっているまさしのお腹に夕陽が当たり始めました。

「そりや、母ちゃんのパライを揚げる腕がいいからよ……」

父ちゃんも、負けずに大声で返しています。魚新のお得意さんは、団地にすむお婆さんたちです。

お婆さんたちは、自分ではフライを揚げることもしないのに、味にはうるさいんだ、つて母ちゃんが言うのを、まさしは聞いたことがあります。

「父ちゃんの仕入れの目がいいからだよ。新鮮なアジじゃないと、身がこんなにきりつとはしてないよ」

父ちゃんと母ちゃんの話を書いているとふたりとも魚屋をやっているのが好きなようです。自分たちの魚新に誇りを持っているようです。

まさしは自分が、あのときに岸くんをぶん殴りたくなかった気持ちはなぜだろう、と思いました。

（おれって、家が魚屋だって、気にしすぎかな？）

まさしは、きのうの日曜日、午後いっぱい、定休日の店の丸洗いを手伝ったのです。

父ちゃんにおだてられて、初めて父ちゃん
の塩辛作りもみしました。

（父ちゃんは、とても嬉しそうだったな…）

母ちゃんは、夕方、手伝いが終わってゴムの長靴を脱ぐとき「まさし、風呂に入りな…
髪もしっかり洗うんだよ」と言っていました。

まさしは、今思うと、母ちゃん、魚の臭いを
気にしてたんだ、と気がつきました。

八・

魚新は、夜の八時に店じまいします。

父ちゃんと母ちゃんが夕飯を食べながら、
にぎやかに話しています。

食卓には母ちゃんの揚げたアジフライがキ
ヤベツの千切りと一緒に大皿に盛り付けてあ
ります。ポテトサラダも添えています。

一杯のビールで、もう赤い顔をした父ちゃん
の横顔が、まさしのいる部屋からも見えて
います。

自分の揚げたアジフライをお箸につまんだ
ままで、母ちゃんが

「まさし、ちよつとこっちにこないかい？」
と、声をかけてきました。

「今日さ、学校で何かあったのかい？ 帰っ
てきたときブスツとしてたね」

母ちゃんは、やつと時間ができた、さあ、
まさし、なんでも聞いてやるよ、といわんば
かりののんびりした声です。

本当に、母ちゃんは聞き上手です。
いつの間にか、まさしは、今日の学校での
出来事を父ちゃんと母ちゃんの隣に座って、
しゃべっていました。

途中まで聞いたところで、とつぜん、父ち
ゃんが、ガハハハと笑い出しました。

「えー 何だ、そんなこと言われて、気にし
てんのか？ 魚屋が魚臭くって当然だろ。ま

さしは、魚新の息子だろ。いちいち腹を立てるなよ」

母ちゃんは、やれやれというように父ちゃんを見てから言いました。

「父ちゃん、まさしにも魚屋をやらせたいのかねえ……あのね、まさし、別に父ちゃんのこととおりにすることあ、ないんだよ」

母ちゃんは、そういった後、少し、間を置いてから言いました。

「父ちゃんは単純なんだから……教室でさ、それもみんなの前で、魚臭い、なんて言われたら、まさしだってショックだよ」

それにしてもおかしいねえ、臭いっていわれないようにさ、風呂にも入れたし気をつけただけだね、と母ちゃんは、ぶつぶつと独り言を言っています。

首をひねりながら、
「まさし、おまえさ、本当は、ここの団地の人たちみたいに、会社勤めの父ちゃんがほしかったんじゃないのかい？」

と、まさしと父ちゃんを半々に見ながら言いました。

「……よくわからないや」

まさしは、小学生になりたての頃「まいどありーい」と団地のおばさんたちにぺこぺこしている父ちゃんをみて、なんだか、いやになっただけがありました。

でも、団地のおばさんたちが、夕方になると店に並んで母ちゃんのアジフライが揚がるのを待っているのを見ると、今では、誇らしい気もしています。

九・

「で、まさし、先生はどういったのさ？」

とつぜん、母ちゃんが話を戻しました。

「え？」

「先生、おまえたちがもめてるときに、なにやってんだ、って言ったんだろ」

まさしも、えーと、あのと、ともういつペン、あのと、ヤツチン先生の言った言葉

を思い返しました。もちろん、すっかり覚えていません。

「ヤツチン先生はね。岸のやつにね、人が嫌がることをいうな。自分がそういわれたらどう思うか！と怒った。そして、おれに寄ってきて：」

「え？ まさしにも？ 何か、先生、まさしにも文句があるのかね？」

「ヤツチン先生はね、おれの服をくんくんと嗅いでね、そう、母ちゃんと同じようにさ：それからみんなに、大げさに騒ぐほど臭くねーよ、って言ったんだ」

「ということは、すこしは、臭ったのかねえ？」

母ちゃんは、まだ、不満そうな顔をしています。

「臭くって結構！　きのう、まさしがよく働いた証拠だぞ：文句あるか！」

父ちゃんが、赤い顔をして横から割り込んできます。

まさしは母ちゃんを見ながら、それからヤツチン先生はね、と続けました。

「山田は、きつと、きのうの日曜日、店をたくさん手伝ったんだ。えらいじゃないか。それで魚の臭いがすこし残ったんだろう、って……」

まさしは、ここまで話すと、何故だかわかりませんが、急に鼻の奥がツーンとしてきました。

（なんだ、これは……）

でも、涙が、ぷーっと目の玉の中でふくらんでくるのがわかります。

母ちゃんは、いつもとは違うまさしを黙ってみています。

父ちゃんは、何にも気がついていません。「母ちゃん、昨日のアルバイト賃な、まさしにあと千円上げてやれ、な、まさし」

わっしわっしとアジフライをキャベツと一緒ににほうばっています。

「うめえなあ……母ちゃんのアジフライ」

父ちゃんが箸の先で皿にあるアジフライを
さします。

「ほれ、まさし、おまえも食べるよ： 温か
いうちがもつとうまいぞ」

まさしは、父ちゃんのまねをしてがぶりと
アジフライに噛み付きました。カリッと衣が
歯に当たって、次にアジのうまみが口いっば
いに広がりました。

やっぱり、いつ食べても母ちゃんのアジフ
ライが一番だ。

アジフライを食べていると、臭いとか臭く
ないとか、どっちでもいいような気になりま
した。今日のアジフライは涙が混じって、す
こし、しょっぱい気がします。